した。発火できるかは使う人のスキルによりますが、これでしばらく火起こし具には困らないと思います。

火起こし具を修理中

3）植物素材の採集（6/1・15、10/6）
4）石器石材調査（6/15・29、8/10、10/6・26）
・太平山野田沢の緑色凝灰岩調査（6/15）

秋田市街地周辺の縄文遺跡からは、薄緑色の石斧がよく見つかります。少し柔らかいため本来は石斧に適さないと石材と思われますが、原石は太平川、岩見川、山内川の河川敷でよく見つかります。太平山野田口登山道、車両進入最深部の沢では、巨大な緑色凝灰岩（グリーンタフ）の露頭がみられます。 少しの加工で石斧の製作が可能と思われる板状の凝灰岩が、崖下に多量に堆積しています。「縄文人がここに目を付けないわけがない。この露頭は縄文時代の石斧原石の一大供給地に違いない」などと、途方もない妄想を抱いて下山しました。

太平山の緑色凝灰岩

・臼館遺跡出土磨製石斧石材調査（6/29 、10/26）
・臼館遺跡出土磨製石斧未成品石材調査（8/10）
・金ヶ崎海岸黒曜石調査（10/6）

旧石器時代から採取され続けた金ヶ崎の黒曜石。過去に膨大な量が採取されたにも関わらず、未だに海岸で転石としてみられる黒い天然ガラスです。小粒でしたがたくさんの原礫を見つけることができ、天候にも恵まれ、男鹿の眺望を満喫できた野外活動でした。

5）湯沢市横堀の赤塚遺跡現地見学会参加（10/26）

今回の赤塚遺跡発掘調査には、考古ボランティアのメンバーでもある地元のS氏が参加し、逐次発掘状況の仔細を知らせてくださっていたので、大きな期待を持っての参加でした。見事な石組の複式炉は圧巻でした。たかが炉跡なのですが、縄文人の繊細な石組の造形美意識には感嘆です。4000年前の赤塚縄文人の生活音が聞こえるような山々の風景と川のせせらぎ。しかし発掘された遺構内には役内川氾濫の生々しい痕跡も刻まれていました。災害に見舞われても再び集落を営む逞しい赤塚の縄文人。雄物川と役内川の合流地点は地形的にもとても豊かな環境であった事が想像できます。

北海道、青森、岩手、そして秋田県各関係者の長年の努力が実を結び、念願であった“北海道・北東北の縄文遺跡群”世界遺産登録の道筋も見えてきました。秋田県内には日常の生活域に多くの縄文遺跡が存在し、今でもその痕跡を見つけることができます。世界遺産登録を機に、秋田の縄文をキーワードに多彩なイベントも計画されることと思います。考古ボランティアに参加して、少し踏み込んだ縄文ワールドを感じてみませんか？　（考古ボランティア　佐川義則）

地質ボランティア

地質ボランティアは、毎週木曜日の午前を中心に活動を行っています。地質の収蔵庫には、博物館で採集したものや県内の研究者から寄贈された資料がいくつもあります。中には、まだ展示用にクリーニングされていない化石や岩石もあります。ボランティア活動では、これら岩石のクリーニングや化石生物の取り出しなど、重要な作業を行っていただいております。また、資料登録に向けての貝化石の同定も行っています。

収蔵庫には，データが不足し、どこで採集されたのか不明なものもありますが、ボランティアの方々の高度な知識とこれまでの経験を生かし，産地の特定も行っています。収蔵庫から未登録の新たな化石も発見されることもあり、驚きと同時にボランティアの皆さんと楽しんでいます。興味のある方は是非、ご連絡いただければ幸いです。　（地質部門　池端広樹）

化石のクリーニング

友の会だより

令和２年
3月
No.49

秋田県立博物館友の会　〒010-0124 秋田市金足鳥崎字後山 52　Tel 018-873-4121　Fax 018-873-4123　E-mail：info@akihaku.jp

令和元年度友の会研修・活動報告

10月10日（木）秋田学を深める研修４

「国指定史跡鳥海山　道者道を探索する」

参加者　14名

今回の研修の目的は、3年前に刈り払いされ、復元、整備された古の修験者が歩いた「道者道」を辿りながら、文化遺産としての鳥海山を再発見すると共に、紅葉などの豊かな自然を観察することであった。

10月10日（木）、快晴に恵まれ、秋田駅を出発したバスは10時過ぎ、鳥海高原花館牧場公園花立クリーンハイツに到着。鳥海山矢島口道者道を復元する会の佐藤さんの解説と案内で二合目の木境から徒歩で出発。木境の登り始めには、鳥海山に登る人を道者と呼び、道代をとった道銭小屋があったとのこと。大物忌神社の手水井戸で手を清め、開山神社へ移動。鳥海山登拝道を開いた比良衛・多良衛の兄弟を祀り、一本足のげたや大きなまさかりを見学。鳥海修験に尽力した仁乗上人の碑からその功績をしのび、続いて、ここまで馬

仁乗上人の碑にて

で参詣できたという三合目の駒の王子へ。四合目の善神長根の入り口で刈り払いされた時に発見された善神石碑に感動し、善神沼を徒歩で一周。途中新道を復元するのにかかわったという78才の佐々木さんにお会いするという偶然にも恵まれた。12時頃五合目祓川に到着。ヒュッテの裏庭で昼食をとる。昼食後は展望台経由で竜ヶ原湿原を一周。展望台からは澄み切った青空のもと、栗駒山、森吉山、真昼岳、和賀山塊、早池峰

四合目善神長根入り口の善神石碑

山等のすばらしい眺望をながめることができた。紅葉は例年10月の始め頃ピークを迎えるが、今年はおそく、少々期待はずれの感があった。それでも姫あざみ、舞鶴草の赤い実、白花とうち、紫色のりんどう等に癒され、熊にも歓迎（？）されず、散策を楽しむことができた。

今回の研修は、古の修験者に思いをはせ、新たに修験道を再現した人々に感謝し、そのおかげで、秋の陽を浴びながら散策できる幸せを感じた一日であった。

（川口百合子）

祓川神社付近の紅葉を背景に

スミレ会（植物標本整理ボランティア）

秋田県立博物館友の会所属植物標本整理ボランティアは、平成7年（1995）に発足しました。会の名前がとても長いものだったので、平成14年（2002）にスミレ

スミレ（小泉潟公園）

ウスバスミレ（八幡平）

平成31（令和元）年度館外研修記録

秋田県立博物館友の会

観察記録

の花を好きな方が多かったことから「スミレ会」と名付けられました。現在、会員は12人。活動歴は、設立当初からの方が1人（今年で25年！）、平均15年位。年齢は90～68才、平均はなんと78才！気持ちも体もまだまだ若さいっぱいです。活動日は毎週火曜日、様々な作業を分担して、地道に黙々とそして楽しく続けています。

生物作業室では、主に維管束植物のさく葉標本を台紙に置き、電気ゴテを使い、糊がついた紙テープで止めていく作業をしています。最小限の紙テープで止めるためにどこに貼った方が良いのか、植物によっては、調べる手がかりになる場所に貼ってはいけないので考えながら作業を進めます。最後にラベルを糊付けします。生物収蔵庫の中では、ラベルに書かれている植物名が正しいかを確認した後、カードにラベルデータを転記してから標本棚に収納します。同時にデジタルデータ化も行っています。

ただ今活動中

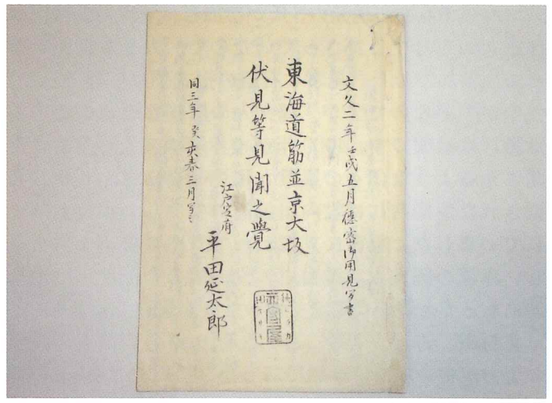
今年度は、数年前から手掛けていた『日本の山地酪農』創始者でもある植物学者の猶原恭爾（なおはら きょうじ 1908～1987）が日本国内外で収集した標本の整理を終えました。また、デジタル化したデータ1,500件をS-Net（サイエンス ミュージアム ネット）に提供しました。このデータは、ここからGBIF（地球規模生物多様性情報機構）へ提供されています。国内のみならず世界中で標本の検索や分布情報などを調べることに役立っているので、これもまた、活動の励みになっています。

植物への理解を深めるために野外観察を年5回ほど行っており、活動を続けていく楽しみのひとつになっています。今年度は、仙北市戸瀬、八幡平、にかほ市獅子が鼻湿原などへ出かけました。八幡平へは前回と異なる季節に行ったので、久々にウスバスミレやイワツツジを初め、亜高山帯で生育している植物の花をたくさん見る事ができました。観察記録は会員のひとりがまとめており、各自の勉強用に役立っています。これからも地道にそして楽しみながら継続できればと考えています。　（スミレ会　阿部裕紀子）

古文書同好会

古文書同好会では、ここしばらく三又村（湯沢市）の茂木久栄家資料の「日記帳」を読んでいましたが、たいへん長いのでちょっと寄り道して、「東海道筋並京大坂伏見等見聞之覚」を読みました。文久2年（1862）、秋田藩士平田延胤（篤胤の孫）が上方の政治情勢の探索を命じられ、江戸藩邸から京・大坂へ登り、その間の見聞を記した文書です。延胤がそのような指令を受けたのは、平田国学の門人の人脈が情報収集に役立つと期待されたためでしょう。

どんな濃密な情報が書かれているかと期待して読んでみたのですが、内容は割とあっさりしていました。道中で耳にした人足たちの噂話、薩摩は「世直し大名」と呼ばれて人気があるとか、赤坂宿で島津の行列とすれ違ったとか、当たり障りの無い記事がほとんどでした。この年は島津久光が、自身の公武合体策を進言するため兵を率いて京にのぼった年です。「島津家は伏見でひそかに検地をしている」と人足たちが噂し、「浪士たちが京都所司代の屋敷を襲撃するらしい」と噂が広まり、久光が入京したときはすわ襲撃かと、火の見櫓で半鐘が打ち鳴らされて大騒ぎだったと記されています。



平田延胤の見聞書

寺田屋に集まって決起を図る志士たちのもとへ久光が使いをやって勃発した寺田屋騒動のことは、人数や人名などなかなか詳しく書かれています。そのほか長州藩士、岡藩士、大坂町人、京都の御用達、船頭などから聞いた話を書いています。

ところが延胤は見聞きしたことすべてを書いたわけではなさそうで、実は延胤は寺田屋事件に深く関わった人物にも会っているのですが、そのことは見聞記に書いていません。濃密な話は書かない方が無難だと思ったのでしょうか。

延胤の書き残した幕末情勢にふれたあと、また「日記帳」の解読に戻りました。今年度は慶応2年分の解読を終え、博物館の研究報告に翻刻を載せることができました。日記は明治3年まで続きます。読了はまだまだ先のことになりそうです。　（歴史部門　新堀道生）

古文書整理ボランティア

古文書整理ボランティアでは、守屋家資料の整理を進めています。今年度は箱Fが終わり箱Gに入って、2月にようやくGのカード取り・封筒詰め作業が終わりました。

木箱に入った未整理の文書をF、Gなどと記号をつけて整理しています。70㎝ほどの小さな木箱ですが、中には文書がぎっしり。いざ整理を始めると、封筒の中から封筒があらわれ、冊子の中から証文があらわれ、いつ尽きるとも知れません。

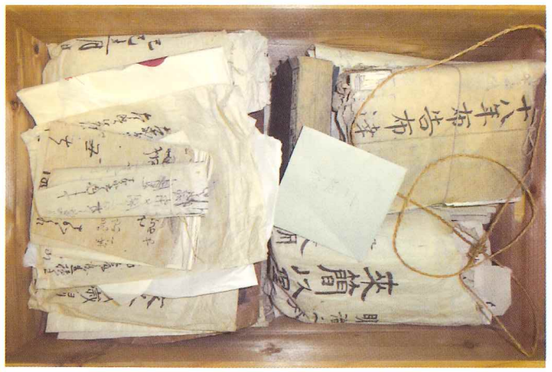
文書一つ一つに番号を決め、資料名、差出人、受取人、年代、形状、数量などをカードに記録します。最終的にはパソコンに入力し、内容・関連性に応じて並べ直し、目録ができあがります。目録がなければ資料を出納できず活用できません。文書が日の目を見るために、地道な整理作業が欠かせません。

整理作業で苦労するのが、資料名をどうつけるかということです。資料にもともと表題が書いてあれば簡単ですが、書いてないことも多く、そうすると似つかわしい名前を考えてあげなくてはなりません。整理作業者はすべからく名付け親とならなくてはなりません。美術工芸品ならば、「阿弥陀如来立像」だとか、「黒塗桧垣文菊花蒔絵硯箱」だとか、名前の付け方に一定の決まりがありますが、文書は様式も内容も多様であるうえ1000点、2000点といった膨大な分量にのぼります。「134号文書」などと命名すれば簡単ですが、それでは内容の察しがつきません。

例えば書状には元々の表題はありません。そこで、差出人の名をとって「誰某書状」と命名し、内容を読みとって「人足賃支払い等につき」などと補記します。そのためには文書を解読して、内容を理解しなくてはなりません。くるくる巻かれた長い書状を、広げたり畳んだりしながら、名付け親たちはスタディルームで日々呻吟しております。

ほんとうに名前のつけようが無いときもあります。単語をいくつか書いただけの、用途不明の紙切れが出てきたら、そのときは「書付」と名付ければいいのです。読んで字のごとく、書かれたものですから。

（歴史部門　新堀道生）



箱G

考古ボランティア

1）土器作り教室（5/18、7/13・27・28、8/31、9/1）

土器成形と焼成の補助の傍ら、今回は市販の粘土に地場産の粘土や砂、植物繊維を混ぜた作品の焼成を試みました。市販の野焼き用粘土とは違う質感に戸惑いながら悪戦苦闘するも、今回も満足のいく土器は焼けずじまい。薄くて軽くて品格の漂う縄文風土器はいつできることやら？次回も工夫を凝らし再挑戦です。

2）火起こし具修理（4/20、8/24、11/30、1/18、2/8）

土器作り教室の野焼きでは火起こし体験も行っています。これまで使い込まれた火起こし具を集め、手近にある部材を工夫して、大小10組程の修理を完了しま